

simc News Letter

Sendai International Music Competition

2025年10月号

仙台国際音楽コンクールニュースレター

ヴァイオリン部門最高位入賞 ムン・ボハ インタビュー 2025年6月8日(日)

取材：萩谷 由喜子（音楽評論家）

一最高位の受賞、おめでとうございます。心境はいかがですか？

ありがとうございます。素晴らしいサポートをしてくださった仙台フィルと広上淳一マエストロ、聴衆の皆様、ボランティアの皆様に感謝いたします。おかげで、魔法のような2週間を過ごすことができました。先生方、友人、家族にも感謝しています。母は仙台までついてきて支えてくれました。

一仙台国際音楽コンクールに参加しようと思われた理由をお教えてください。

このコンクールのことは前から知っていましたが、昨年(2024年)秋から本気で検討を始め、詳しく調べてみました。すると、一般のコンクールではファイナルでしか協奏曲を弾く機会がないのに、仙台国際音楽コンクールでは、予選からオーケストラと共演できることを知りました。しかも、課題曲に大好きなモーツァルトの協奏曲が入っていたので、参加したいと思ったのです。

一では実際にコンクールに向けて、どのような練習をされてきましたか？

音程を正確に取れるようにすることと、強弱の付け方に注意を払うこと、それから作曲家の意図を汲み取りながら、自分のイメージレーションも大切に曲に盛り込めるようにすることなど、すべての細部に意識を向けて練習してきました。特に、音程を正しく取れるようにするための練習は、どれだけやっても充分ではないと感じています。

一ところで、ヴァイオリンを始められたきっかけは何だったのですか？

幼い頃の私は、とにかく本を読むことが好きなこどもでした。家の近くに本屋さんがあって、毎日、母に連れられてその本屋さんへ行っていたのですが、本屋さんのスタッフの方が、母にこんなことを言ってくれたのです。うちの娘はヴァイオリンをお稽古していたのだけれど、もうやめてしまったので、娘が使っていたサイズの小さいヴァイオリンがあります。お宅のお嬢ちゃん、そのヴァイオリンでお稽古を始めてみる気はない？と。それが私とヴァイオリンとの出会いでした。始めてみたら、もうすっかり虜になって、今日までずっと続けています。



一それが韓国にいらしたときのことですね。そのあと、ブラハでも勉強されたそうですね。

はい、父の仕事の関係でブラハに移り、ヴァイオリンの先生を探しました。そうしたら、ヨゼフ・シュパチェック先生という、チェコ・フィルのコンサートマスターになられた若い先生のことを知り、直接連絡してレッスンを引き受けていただいたのです。私が最初の、そして唯一の弟子なのではないでしょうか。

一ザルツブルクでも勉強されたとか。

ブラハ時代、シュパチェック先生のレッスンも受けていましたが、それとは別に月に一度か二度くらい、母が車を運転してブラハからザルツブルクまで連れて行ってくれて、ピエール・アモイヤル先生にみていただきました。

一それで現在は、カーティス音楽院でアイダ・カヴァフィアン先生についておられるわけですね。

はい、カーティス音楽院で勉強するのが夢でした。カヴァフィアン先生は本当に良く私のことを理解してくださり、的確なアドバイスをしてくださいます。今回、最高位をいただけたのは、シュパチェック先生、アモイヤル先生、カヴァフィアン先生他多くの先生方のおかげです。

一セミファイナルではドヴォルザーク、ファイナルではブルッフの『スコットランド幻想曲』を選択されました。選んだ理由をお話してください。

ドヴォルザークはブラハにいたときに習った思い出の曲です。ブラハの街並みを思い浮かべながら弾きました。ブルッフはメロディが甘美で情熱にも満ちていて、大好きな曲です。アモイヤル先生の先生に当たるヤッシャ・ハイフェッツの得意とする曲だったことも、この曲に惹かれた理由の一つです。

一将来の夢は？

ソリストです。ソリストとして、愛する音楽を世界中の美しいステージで演奏するのが夢です。私の演奏を通して、多くの人に喜びを届けることが出来たら嬉しいと思っています。

ピアノ部門優勝 エリザヴェータ・ウクラインスカヤ インタビュー 2025年6月29日(日)

取材：高坂 はる香（音楽ライター）

一全ての演奏を終えて、今のお気持ちは？

チャイコフスキーの協奏曲を2回演奏しましたが、全く別のコンチェルトを弾いた気分です。というのも、本選のときは「登録番号 42 番」という名前で呼ばれて弾きましたが、入賞者披露演奏会では「優勝者のウクラインスカヤ」として演奏できたからです！

一モーツァルトの協奏曲 K467 のカデンツァは自作だそうですね。

はい、1楽章のほうは1年前、3楽章のほうは日本に着いてから書き始めたものです。

まずはモーツァルトの楽譜を開いて主題を書き出したあと、偉大な先人たち、例えばシフのようなピアニストがどの主題を使いどんなカデンツァを書いたのか聴き比べました。そのうえで自分が好きな主題を並べて作曲し、マエストロ高関に渡すため、5時間かけて楽譜を作りました。自分のカデンツァを弾いたのは初めて。評価していただけたことが嬉しいです。

一チャイコフスキーではオーケストラと親密にコミュニケーションをとっているようでしたね。

初めてオーケストラと演奏したのは20歳のときで、回を重ねるにつれてオーケストラを聴く余裕ができ、今は室内楽のように一緒に音楽を作る感覚を持てるようになりました。

マエストロ高関と仙台フィルは、最初から私の好きなように弾かせてくれました。“サポートするから自由に弾いて”という気持ちが伝わり、力をくれました。最高のマエストロとオーケストラです。

一演奏後、毎回マエストロの手をとっていたのはその気持ちの表れですか？

マエストロは毎回控えめに、後ろに隠れてソリストを立てようとしてくださっていましたが、考えてみれば誰よりも仕事量が多かったのですから、感謝の気持ちを表しました！

一音楽の道に進んだきっかけは？

両親がロシア文学の言語学者で、私は彼らが講義のため一時的に訪れていたドイツで生まれ、3ヶ月後にサンクトペテルブルクに戻りました。

歌が好きで5歳で合唱団に入りましたが、メインメンバーになるには楽譜を読めないといけないといわれ、母に相談して音楽院に入りました。今はサンクトペテルブルク音楽院で教えながら論文執筆中です。テーマはムソルグスキーのピアノ作品です。



一仙台国際音楽コンクールを受けたきっかけは？

これが2回目の挑戦で、前回は予備審査を通過できず、仙台に来られませんでした。でもとにかく日本が大好きで、特に映画は黒澤映画からジブリまでいろいろ観ています。以前数日だけ日本に来ましたが、もう一度ちゃんと訪れてきて参加しました。

一これまでに受けたマスタークラスなどで印象深かったのは？

シフですね。私にとって彼は“天上の人”ですから、その人が目の前で教えてくれていることが信じられませんでした。彼のタッチは特別で、まるで子猫を撫でる時のようです。音を出したときの柔らかさ、注意深さ、優しさに人間性が表れています。大きな愛情をもって接してくれて、彼の前で弾くだけで上手くなる気がしました。

一ご自身が教える立場で心掛けていることは？

たくさんあります。私は厳しい先生なんです（笑）！音楽は指と耳だけ作るものではないので、一緒に劇場に行き、本を読み、シェイクスピアの作品を役を振り分けて朗読します。木や花の名前、鳥の鳴き方、ラファエロが描いたマドンナはどんな絵か知るところを大切にしたいと伝えています。

一仙台観光はできましたか？

はい、アレクサンドル・クリュチコさんと青葉城址にいき、近くの遊園地でジェットコースターに乗って髪飾りを失くしました。お店の人が小さな窓から手だけ出して料理を提供してくれるラーメン店には3回行きました（笑）。あと文房具が大好きなので、ファイナルの後は自分へのご褒美として2万円分くらい買いました！

一Shigeru Kawai を選んだ理由は？

フィーリングで選びました。Shigeru Kawai は今回初めて弾きましたが、自分に近い性格だと感じたのです。河合楽器のみなさんはまるで家族のように支えてくれました。ここで感謝を申し上げたいです！